

巻頭言にかえて

平成18年度は、総合情報基盤センターのこれまでの活動が、熊本大学の高度情報化キャンパス実現のために全学的に広がった年と見ることもできるとともに、当センターにとっても大きな変化を伴った飛躍の年でありました。平成14年度に総合情報基盤センターに改組された際、全学必修科目として実施している情報基礎教育でのe-Learningの活用が、平成16年度の特徴GPに採択されこの活動も3年目となりました。この間、継続的に全学のe-Learningを推進するために種々の活動を行ってまいりましたが、そのひとつの成果として、平成18年4月に日本で初めてe-Learningの専門家を養成する大学院、社会文化科学研究科教授システム学専攻が発足しました。当センターからも多くの教員が同専攻の発足から運用に携わっております。同専攻では、e-Learningの持つ可能性を最大限活用すべく、コースの設計から教育用コンテンツの開発、各講義の実施まで関係教職員の協力的な連携のともに取り組んできました。

一方、セキュリティに関する社会環境も急速に変化しており、学内の個人情報保護やソフトウェアライセンスの管理等、本学のセキュリティ・ポリシーへの完全な対応のための個人認証システムを、各種システムに導入しその普及を促進してきました。さらに、本センターの教育研究用コンピュータシステムを、本年度更新し、教育システムとしての機能の大幅な強化を図りました。具体的には、4年に一度の教育研究システムのリプレースに際して、事務系および図書館システムとの一括入札や、実習用PCを従来の900台強から40%増の1350台へと増強しました。また、学内のセキュリティ高度化のための取り組みも積極的に取り組んで参りました。

本センター広報では、これら平成18年度の活動について、その概要を報告させていただきます。

熊本大学総合情報基盤センター長 宇佐川 毅